様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３２００８６

研究課題名（和文）東アフリカにおけるスワヒリ語諸変種の記述研究

研究課題名（英文）Descriptive Study on Swahili Varieties in East Africa

研究代表者
竹村　景子（TAKEMURA, Keiko）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・准教授

研究者番号：２０２５２７３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,200,000円、（間接経費）　3,960,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、スワヒリ語の方言的種々性を明らかにするために、東アフリカの特にタンザニアとケニアにおいてスワヒリ語諸変種の「基礎文法」の記述および「基礎語彙600語」の収集を行なった。また、スワヒリ地方に限っては「海洋生物に関する語彙」も収集し、変種による語彙の違いの有無を確認することを目指した。「オーラルヒストリー」および「口承文芸」も一次資料として収集した。これらの調査から、例えばザンジバル島北部の近隣の村々における語彙および文法特徴が異なることが明らかとなり、およそ24に分類できるとした先行研究におけるスワヒリ語諸変種の分布地図について、再考する必要があるのではないかという結論に達した。

研究成果の概要（英文）：In this project, we conducted descriptive-linguistic field work in East Africa especially in Tanzania and Kenya, in order to clarify the varieties of Swahili. We have collected "600 basic vocabularies" and described "basic grammar" in some villages. Also we have collected "vocabulary related to marine life" in Swahili Coast Area to confirm the presence or absence of differences in vocabulary by varieties. We have collected some "oral histories" and "oral literature" too as primary references for linguistic study. In previous studies on Swahili Varieties it was said that there are about 24 varieties in Swahili, but from the results of our research, it can be said that we have to reconsider the map of the distribution of Swahili varieties because it has been revealed that in just neighboring villages in the Northern part of Zanzibar Island there are some differences in vocabulary and grammar of their Swahili varieties.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：スワヒリ語諸変種　基礎語彙　文法記述　民俗語彙　オーラルヒストリー　口承文芸

１．研究開始当初の背景

アフリカ大陸には約 2,000 言語（Grimes, B. F. (ed.) 1996. *Ethnologue: Languages of the World, 13th edition*. Dallas: Summer Institute of Linguistics and University of Texas at Arlington によれば、2,035 言語）が存在すると言われている。欧米を中心にこれら言語の記述研究が進められてきた結果、アフリカ大陸固有の言語群の分類方法も定着しつつある。日本のアフリカ諸語研究の蓄積は残念ながら欧米から半世紀以上遅れていると言われてきたが、それでも、これまでにも優れた記述言語学的研究がなされてきた（Bantu Linguistics Series(ILCAA)等参照）。ただ、それらの研究では、現在「危機言語」と称される少数民族の言語、それも欧米などでの先行研究のほとんどない言語を対象とすることが多かったと言える。

本研究で対象としたのは、上述の「危機言語」とはほど遠い存在と認識されている「スワヒリ語」である。古くは 19 世紀初頭にヨーロッパ人宣教師による記述が試みられ、東アフリカにおいては最も早く（1930 年）標準語と正書法が確立された言語である。植民地期以前から植民地期を通じてヨーロッパ人宣教師、入植者、そしてもちろん言語学者たちによる調査研究が行なわれており、おそらくその蓄積はアフリカ諸語の中で群を抜いている。現在ではソマリア共和国南部、ケニア共和国、タンザニア連合共和国、ウガンダ共和国、ルワンダ共和国、ブルンジ共和国、コンゴ民主共和国東部、ザンビア共和国北部、マラウィ共和国北部、モザンビーク共和国北部、コモロ諸島、マダガスカル共和国北部一地域で通用する「超民族語」であり、ケニアとタンザニアでは「国家語」および「公用語」の地位を与えられ、「大湖地域」と称されるエリアに含まれるケニア、タンザニア、ウガンダ、ルワンダ、ブルンジ、コンゴ民主共和国における「地域共通語」として、また、東アフリカ共同体の「公用語」としても認められている言語である。話者数は 7,000 万人を超えると言われており、ユネスコの推計では今世紀中に 1 億人を突破すると見積もられる。これほどに研究蓄積があり、且つ、公的権力を与えられたアフリカの土着言語は他にない。さらに、欧米やアジアにおいてスワヒリ語を教授する教育機関が少なからず存在し、「アフリカの言語と言えばスワヒリ語」という認識が広まっていることも事実であり、「スワヒリ語－日本語辞典」・「日本語－スワヒリ語辞典」のように、スワヒリ語と他言語の辞書編纂がなされ、各言語による「スワヒリ語文法書」もあまた出版されている。このような背景から、「研究し尽くされた」言語であるとの認識が広がっていると言っていいだろう。

しかしながらスワヒリ語研究者の宮本は、「バントゥ諸言語のなかで最も話し手人口が多く、研究が最も進んでいると見られるスワヒリ語の場合に限っても、その歴史はほとんど解明されていない。アフリカ史研究叢書の一冊として刊行された W. H. Whiteley（1969）は、「言語と文学」「初期の歴史」「内陸への拡大」「植民地期」「『標準』スワヒリ語」「独立後」「国語の諸問題」と題する 7 編の論文で構成されているが、これを見てもわかるとおり、著者の関心は、言語の内的機構と構造（音韻・文法・語彙）の変化を明らかにするのではなく、むしろスワヒリ語の生態、社会史ともいうべきものの究明に注がれている」（宮本正興．『スワヒリ文学の風土—東アフリカ海岸地方の言語文化誌』．2009．第三書館．p.290）と述べ、「スワヒリ語とスワヒリ文学の歴史を明らかにするためには、言語史と社会史の両面からの均衡のとれたアプローチが必要である。…中略…筆者の見解によれば、スワヒリ語に関して言語史と社会史からの両面アプローチの第一歩として、方言の考察と方言区画の設定が緊急である」（同掲書，p.290）と指摘している。

研究代表者は、これまでに東アフリカ海岸地域（スワヒリ地域）での調査を数回にわたって行なってきた。調査内容は記述言語学的、社会言語学的、社会学的なものに大別できるが、いずれの調査においても現地の人々が日常用いるスワヒリ語を聞き取ることから始めた結果、いわゆる「標準スワヒリ語」と彼らの母語である様々なスワヒリ語変種との間に、文法的にも語彙的にも大きな隔たりがあることを確認できた（竹村景子．1997．「スワヒリ語チャアニ方言について—音韻と時制を中心に—」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 9 号．pp.118-129．大阪外国語大学、竹村景子．2002．「一つの言語とは何か—ザンジバル島における「方言」と「標準語」の間—」『現代アフリカの社会変動—ことばと文化の動態観察』（宮本正興・松田素二編）．pp.194-219．人文書院）。同時に、日本の「方言の変容」状況と同様、スワヒリ語諸変種にも明らかに標準語からの影響と見られる変容が起こっており、老年層と若年層の用いる話体には明らかな差異が存在することも確認した。東アフリカにおいては「標準語」の使用が拡大する一方であることから、今後、この変容が進行し、諸変種の継承そのものが危ぶまれる事態になると考えられるため、スワヒリ語の「標準語」を除く諸変種は「危機言語」であると認識され得る。しかし、これら様々な変種についての記述研究は、日本だけでなく広く欧米を見渡した場合でも、わずかに Whiteley の *KI-MTANG'ATA: A Dialect of the Mrima Coast - Tanganyika*. East African Swahili Committee, Makerere College, KAMPALA, 1956 および The Dialects and Verse of Pemba - An Introduction. East African Swahili Committee, Makerere College, KAMPALA, 1958 などが存在するのみであり、それらも包括的な文法記述と語彙収集ができているわけではなく、「文法スケッチ」にとどまって

いる。以上のことから、宮本が指摘したスワヒリ語研究において決定的に欠如している点、すなわち、できる限り多くの変種について「言語の内的機構と構造（音韻・文法・語彙）」に焦点を当てて徹底的な記述研究を行なうことが、日本におけるスワヒリ語研究にとって急務であるとの結論に至った。

２．研究の目的

東アフリカにおける「地域共通語」であり「超民族語」であるスワヒリ語は、アフリカ大陸固有の言語としては最も有名であり、植民地支配という歴史的経緯から特に欧州における研究の歴史は非常に長く、研究蓄積も多いが、日本における調査研究の対象としてはこれまであまり取り上げられてこなかった。スワヒリ語が属するバントゥ諸語の他言語に関する研究は盛んに行なわれていることから考えると、欧米での調査研究が盛んであるために、「すでに研究し尽くされた」という認識が広がっているのではないかと考えられる。しかしながら、従来の研究対象は専ら「標準スワヒリ語」であり、東アフリカ一帯で用いられている様々な変種にまで目が向けられてこなかった。本研究では、スワヒリ語の諸変種の記述研究とそのための一次資料収集を行ない、「一つの言語」として認識されてきたスワヒリ語の重層性と複合性を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

研究期間は 3 年間で、個人による地域調査期間、共同調査期間がその大部分を占めた。具体的には、各調査地点でスワヒリ語変種の記述調査にふさわしいコンサルタント 1 名を選定し、当該コンサルタントの母語であるスワヒリ語変種での**基礎語彙 600 語**（場合によっては **2000〜3000 語**）および**基礎文法**の記述調査を行なった。それら**基礎語彙と基礎文法については、各地点で同一の調査票を用いた**。また、それとは別に、各調査地点において「老年層」に当たる人々を数名選定し、文法記述のための一次資料としての**オーラルヒストリー**の聞き書き、および、**口承文芸**収集を行なった。

コンサルタントとしては、できれば**その地点から移動した経験のない老年層の女性**を獲得したいとしていたが、やむを得ない場合は同年代の男性コンサルタントでもよいこととした。**住み込みによる参与観察とインタビューを基本**としたが、対象地域の大学や研究機関で資料収集、調査研究を実施し、現地研究者との交流もはかった。さらに、特に海岸部・島嶼部での調査に参加した者は、**スワヒリ地域の民俗文化に見られる同質性と異質性を明らかにする**ため、**「海洋生物に関する語彙調査票」を用いて、魚類、甲殻類、貝類等の語彙に見られる「方言的種々性」を把握**することを目指した。スワヒリ地域はインド洋文化圏の西端に当たり、インドネシアやマレーシア等と同様に「ココヤシ文化」を保有し、また、豊富な魚介類を誇る漁場でもあることから、これらの植生や海洋生物に関する語彙が人々の暮らしに深く根付いている。南北に細長いベルト地帯であるスワヒリ地域で、これらの語彙がどのように分布しているのかを詳細に記述した。

４．研究成果

3 年度にわたり、研究代表者、研究分担者、研究協力者がそれぞれの調査地点で「基礎語彙 600 語（もしくは 2000〜3000 語）」、「基礎文法」、「オーラルヒストリー」、「口承文芸」、「海洋生物に関する語彙」のうち、少なくとも 1 項目、時間的に余裕がある場合は複数項目の調査を行なった。

「基礎語彙」については、タンザニア連合共和国のダルエスサラーム市、キリマンジャロ県マチャメ市、アルーシャ県カラトゥ市、ザンジバル島のチャアニ村、キベニ村、キドティ村、マクンドゥチ村、ジャンビアーニ村、ペンバ島のキユユ村、ウェテ市、ケニア共和国のナイロビ市において収集することができた。このうち、チャアニ村では 3000 語近い語彙を収集している。

また、「基礎文法」はチャアニ村、キベニ村、マクンドゥチ村、ジャンビアーニ村で記述することができた。非常に興味深いことに、先行研究では同一変種が話されているとされるザンジバル島北部において、特に英語の be 動詞に当たる動詞表現の過去形に着目した場合、ごく近い村同士で構造が異なることがわかった。また、テンス・アスペクト表現に着目すると、「標準スワヒリ語」と大きな違いを見せる変種が少なからず存在することがわかった上、大陸側の変種を記述した先行研究と比較すると、極めて類似した特徴を示す変種が島嶼部にも存在することがわかった。これらのことから、先行研究でおよそ 24 と言われてきたスワヒリ語の変種の分布について、再考の必要性が浮上したと言える。さらに、老年層と若年層の言語使用状況を参与観察した結果、明らかに若年層は「標準スワヒリ語」の影響を受けて自らが生まれ育った地の変種を変容させており、スワヒリ語内部の「変化」について詳細に記述していく必要性があることを示していると思われる。

女性たちの「オーラルヒストリー」の収集と「口承文芸」の収集については、各地の変種での記述を試みたことから、言語学的に高い価値のある一次資料となったことは言うまでもないが、歴史学や文学の観点からも重要な資料となったのではないかと考えられる。なぜなら、「オーラルヒストリー」では、国家の歴史を記述する際には顧みられなかった市井の女性たちの活動を克明に記録したことから、例えば、従来は見過ごされがちだった「ザンジバル革命」前後の女性たちの活動について把握することができたからである。「口承文芸」においても、書籍等でま

とめられている「昔話」は「標準スワヒリ語」で統一的に書かれることが多いため、いわゆる口語体での各地の変種バージョンは滅多に読むことができない。本プロジェクトで収集されたものは、今後の口承文芸研究に役立つであろう。

なお、3 年間の調査結果の一部については、日本アフリカ学会学術大会において口頭発表を行なった他、研究雑誌等に論文や研究ノートの形でまとめている。また、2012 年度には国際シンポジウム「International Workshop on Bantu Languages」を開催し、本プロジェクトに関わった数名も研究発表およびコメントを行なった。その際、ゲストスピーカーとして参加したロンドン大学 SOAS 校のルーツ・マーティン博士（バントゥ比較言語学）から、「スワヒリ語諸変種のいわゆる be 動詞表現と過去時制表現が標準スワヒリ語とこれほど異なることがわかったのは大変興味深い」というコメントをいただいた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）

①竹村景子．2014．「チャアニ変種の接続形と命令形概観」『スワヒリ＆アフリカ研究』25．120-129．（査読なし）

②米田信子．2014．「バントゥ諸語における自他動詞の派生関係」『スワヒリ＆アフリカ研究』25．54-65．（査読有）

③小森淳子．2014．「バンバラ語の「形容詞」の特徴について」『スワヒリ＆アフリカ研究』25．130-144．（査読なし）

④藤井千晶．2014．「化け物の昔話」『スワヒリ＆アフリカ研究』25．106-119．（査読なし）

⑤宮﨑久美子．2014．「ジャンビアーニ変種記述調査報告（2）―文法概要―」『スワヒリ＆アフリカ研究』25．145-161．（査読なし）

⑥YONEDA Nobuko．2013．“Five Level in Herero (Bantu, R31)” *Five Levels in Clause Linkage* (TSUNODA Tasaku ed.)（国立国語研究所共同プロジェクト報告書）．1169-1216．

⑦竹村景子．2013．「スワヒリ語諸変種記述調査報告（2）―キベニ変種およびキドティ変種基礎語彙 600 語―」『スワヒリ＆アフリカ研究』24．50-72．（査読有）

⑧小森淳子．2013．「スワヒリ語のいわゆる「壁塗り交替」構文について」『スワヒリ＆アフリカ研究』24．159-170．（査読有）

⑨宮﨑久美子．2013．「ジャンビアーニ変種記述調査報告（1）―基礎語彙 600 語―」『スワヒリ＆アフリカ研究』24．32-49．（査読有）

⑩井戸根綾子．2013．「ペンバ島キユユにおけるスワヒリ語基礎語彙 600 語の記述調査」『スワヒリ＆アフリカ研究』24．1-15．（査読有）

⑪藤井千晶．2013．「マカメ・ワ・マカメの話」『スワヒリ＆アフリカ研究』24．16-31．（査読有）

⑫米田信子．2012．「スワヒリ語における 2 種類の関係節」『CLAVEL』2．13-26．（査読なし）

⑬米田信子．2012．「アフリカにおける識字を考える」『ことばと社会（特集：リテラシー再考）』14．43-66．（査読有）

⑭竹村景子．2012．「スワヒリ語諸変種記述調査報告（1）―チャアニ変種基礎語彙 600 語―」『スワヒリ＆アフリカ研究』23．64-82．（査読有）

⑮小森淳子．2012．「アフリカ諸語における「形容詞」について―ヨルバ語とバントゥ諸語を例に―」『スワヒリ＆アフリカ研究』23．167-185．（査読有）

⑯米田信子．2012．「スワヒリ語のアクセント―アクセントフレーズを中心に―」『自立調和的視点から見た音韻類型のモデル』（科研20242010成果報告書）．139-148．（査読なし）

⑰井戸根綾子．2012．「ラムの女性が語るライフヒストリー（1）」『スワヒリ＆アフリカ研究』23．23-47．（査読有）

⑱藤井千晶．2012．「ザンジバルにおけるスワヒリ語変種の語彙調査―貝類の名称を中心に―」『スワヒリ＆アフリカ研究』23．48-63．（査読有）

⑲YONEDA Nobuko．2011．“Word order in Matengo (N13): Topicality and informational roles”, *Lingua*, 121-5．754-771．（査読有）

〔学会発表〕（計 12 件）

①YONEDA Nobuko．2014 年 3 月 1 日．“Conjoint/Disjoint Distinction in Matengo(N13)”（International Workshop on Bantu Languages, ロンドン大学 SOAS 校，英国）

②竹村景子・宮﨑久美子．2013 年 5 月 25 日．「スワヒリ語諸方言調査報告―接続形と命令形について」（日本アフリカ学会第 50 回学術大会，東京大学駒場キャンパス）

③米田信子．2013 年 5 月 25 日．「スワヒリ語におけるアクセント・フレーズ」（日本アフリカ学会第 50 回学術大会，東京大学駒場キャンパス）

④米田信子．2013 年 3 月 16 日．「ヘレロ語名詞の声調 (Bantu R31)：声調グループと実現形」（東京音韻論研究会（招待講演），東京大学駒場キャンパス）

⑤竹村景子．2012 年 11 月 10 日．「The Past Sentence of “Be-verb”」（International Workshop on Bantu Languages，大阪大学中之島センター）

⑥米田信子．2012 年 11 月 10 日．「Noun-modifying clauses in Bantu languages」（International Workshop on Bantu Languages，大阪大学中之島センター）

⑦竹村景子．2012 年 5 月 26 日．「スワヒリ語諸方言調査報告（1）―チャアニ変種（ザンジバル島北部県北部 A 郡）について―」（日

本アフリカ学会第 49 回学術大会，国立民族学博物館）
⑧宮崎久美子．2012 年 5 月 26 日．「スワヒリ語諸方言調査報告（2）～ジャンビアーニ変種 (ザンジバル島南部県南部郡) ～」（日本アフリカ学会第 49 回学術大会，国立民族学博物館）
⑨米田信子．2011 年 12 月 18 日．「バントゥ諸語の名詞修飾節―スワヒリ語とヘレロ語の例―」（「複文構文の意味の研究」ワークショップ，神戸ユニティ）
⑩竹村景子．2011年5月22日．「スワヒリ女性の声を聞く―「結婚」を通して見るスワヒリ社会の実情（1）～ザンジバル島チャアニ村およびペンバ島ウェテ市の事例から～」（日本アフリカ学会第48回学術大会，弘前大学）
⑪宮崎久美子．2011年5月22日．「スワヒリ女性の声を聞く―「結婚」を通して見るスワヒリ社会の実情（2）～ザンジバル島ジャンビアーニ村の事例から～」（日本アフリカ学会第48回学術大会，弘前大学）
⑫井戸根綾子．2011年5月22日．「スワヒリ女性の声を聞く―「結婚」を通して見るスワヒリ社会の実情（3）～ケニア、ラム島の事例から～」（日本アフリカ学会第48回学術大会，弘前大学）

〔図書〕（計 7　件）
①米田信子．2014．『日本語複文構文の研究』益岡隆志他編（「バントゥ諸語における名詞修飾節の形式と意味」pp.617-643，総ページ数 721p）．ひつじ書房．
②小森淳子．2014．『アフリカ社会を学ぶ人のために』松田素二編著（第 1 部 2 章「言語」pp.30-42，総ページ数 311p）．世界思想社．
③竹村景子．2013．『いま、世界で読まれている 105 冊』TEN-BOOKS 編（「奴はイッちまった」pp.198-200，総ページ数 271p）．株式会社テン・ブックス．
④竹村景子．2012．『着衣する身体と女性の周縁化』武田佐知子編（「「超民族衣装」カンガの今とこれから―スワヒリ地方における着衣の実践―」pp.75-95，総ページ数 500p）．思文閣出版．
⑤米田信子．2012．『ボツワナを知るための 52 章』池谷和信編（第 11 章「ヘレロ語を話す人びと―ヘレロ人とンバンデル人―」pp.78-83，総ページ数 322p）．明石書店．
⑥塩田勝彦、竹村景子、小森淳子、米田信子、品川大輔、神谷俊郎他 14 名．2012．『アフリカ諸語文法要覧』塩田勝彦編（竹村景子「スワヒリ語トゥンバトゥ方言（G43）」pp.211-226，小森淳子「バントゥ諸語概説」pp.151-155，「ケレウェ語（JE24）」pp.169-184，米田信子「バントゥ諸語概説」pp.151-155，「マテンゴ語（N13）」pp.241-255，「ヘレロ語（R31）」pp.257-271，品川大輔「ルゥ語（E61）」pp.185-198，総ページ数 301p）．渓水社．
⑦米田信子．2012．『多言語主義再考―多言語状況の比較研究』砂野幸稔編（第 1 部第 3 章「ヨーロッパ発「多言語主義」とアフリカの多言語状況」pp.118-141，総ページ数 755p）．三元社．

６．研究組織
(1)研究代表者
竹村景子（TAKEMURA Keiko）
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：20252736

(2)研究分担者
小森淳子（KOMORI Junko）
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：10376824
米田信子（YONEDA Nobuko）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：90352955

(3)連携研究者
なし